大和物語

沖つ白浪　―　現代語訳　―

昔、大和の国、葛城の郡に住む男と女がいた。この女は、容貌がたいそう美しかった。年来、互いに思い合って住んでいたが、この女は、たいそう貧しくなってしまったので、（男は）思い悩んで、（女のことを）この上なく大切に思いながら、他に妻を作ってしまった。この今の妻は、裕福な女だったのである。（この妻のことを）特別に愛しいとは思わないが、（男が）行けばたいそう大切にしてくれ、身にまとう装束もたいそう美しく整えさせなさった。

このように裕福な所に慣れて、（もとの妻の所へ）来てみると、この女は、たいそうみすぼらしい様子で暮らしており、（男が）こうしてほかの女のところへ出歩くのに、嫉妬しているようにも全く見えないこともあり、（男は女を）ひどく不憫だと思った。（女は）内心では、この上なく妬ましく辛く思っているのを、我慢しているのだった。（男がもとの妻の所に）泊まろうと思う夜も、（女は）やはり「（今の妻の元へ）行きなさい。」と言ったので、自分がこのように出歩くのを妬まず、（それでいて）他に男を通わせているのだろうか、そんなことをしないなら、きっと（自分を）恨むこともあろうなどと、心の中で思った。

そこで、（男は）出て行くと見せかけて、庭の植え込みの中に隠れて、男が来るかと（思って）見ると、（女は）縁側に出て座って、月が実にたいそう美しい時分に、髪を櫛でとかしたりしている。（女は）夜が更けるまで寝ず、たいそうひどく嘆いて物思いにふけっていたので、（男は）人を待つようだと思って見ていると、（女は）前にいた召し使いに言った。

風が吹けば沖の白波が立つというその竜田山を、夜中にあなたは一人で越えているのでしょうか。

と詠んだので、（男は）自分の身の上を案じているのだったよと思うと、たいそう愛しくなった。この今の妻の家は、竜田山を越えて行く途中にあった。

こうしてさらに見ていたところ、この女は、泣き伏して、金属製の碗に水を入れて、（それを）胸にあてていた。おかしなこと、どうするのだろうと思って、なおも見る。すると、この水が、熱湯へと沸き立ったので、（女は）湯を捨てた。また水を入れる。見ているとたいそう悲しくて、（男は思わず）走り出て、「どんなお気持ちになられて、このようになさるのですか。」と言って、（女を）抱きかかえて寝てしまった。こうして、（男はそれ以来）よそへも全く行かずに、（この女のもとを）ずっと離れずにいた。

こうして、多くの月日が経って（男が今の妻を）思いやることには、何気ない顔ではあるが、（女が心の中で）思うことは実に大変なものだったのだから、こうして（自分が）訪ねて行かないのを（今の妻は）どう思っているだろうと思い出して、例の女の元へ行ったのだった。長らく行かなかったので、（男は）気が引けて（外に）立っていた。そして垣根の隙間か

らのぞき見ると、（かつては）自分には美しいと見えたけれど、（今は）たいそうみすぼらしい着物を着て、大きな櫛を額髪につきさしていて、自らの手で飯を盛っていた。全くひどいと思って、（もとの妻のところへ）帰って来たまま、（今の妻の元へは）行かなくなってしまった。この男は王族であった。